

音たてぬ

昔より

今もなほ

朝露に

夕月に

垣のうの花。

波とかけつゝ

めでし卵の花

めづる卵の花

色はかゝやき

光にはへり

首 夏

去にし日に見し

いつしかかはる

花にはつらき

いとゝ待たるゝ

小川のながれ

暑からぬ程の

はらから二人

目だかすくふも

夏 く さ

花さかり

若みどり

風をしも

夏は來ぬ

ゆるやかに

日はさして

衣かゝけ

おもしろく

若葉のかけに

遊びにくらす

螢

庭の木たちに

露の光と

暗を照らして

いつ地の露に

我庭ちかく

暗を照らして

學びの窓に

いざや學ばん

初夏風

みどり涼しき

青葉をわたる

ひとりたもとを

行きかひて

夏は來ぬ

夏 く さ

只ひとつ

見えつるは

飛ぶはたる

あきてけん

こがれきて

飛ぶはたる

よび入れて

文のみち

加藤ひな子

夏木立

ゆふ風に

吹かせつゝ